

富山県氷見市堀田大久前遺跡

発掘調査概報

1980年3月

氷見市教育委員会

発掘調査概報の発刊にあたって

いまの十二町潟は、むかしの布勢湖の名残りであるといわれています。布勢湖というのは、かつて大伴家持が、越中の国司として在任中に、しばしば来遊して、その美しい眺を楽しんだところであります。万葉集の中に、この湖をうたった歌が幾首ものせられています。

この美しかった湖が、当時、どの位の広さをもっていたかということについては、いろいろの意見があつて判然としたことはわかっています。

神代羽連という遺跡がありますが、ここは耕地整理の折に多数の土師器を出土したのですが、今回発掘した堀田大久前の遺跡に比べると、昔の布勢湖の湖心に大変近いところですが、土器が出た標高は、現在の十二町潟の水面とあまり差がないところのように記憶しています。

それに比べると、今回の発掘地・堀田大久前は、神代羽連遺跡より、ずっと湖尻に近いところにあります。発掘の土器出土面からみると、神代羽連遺跡が、昔時は、どういう地形上にあったのかと考えさせられます。

このほか、むかしの布勢湖の形状は、いろいろわからないところがありますが、この解明はこれから研究にまちたいと思います。

この報告書も、そのような折、また役立つことと思います。

不備の点が多くあることと思いますが、発掘の概況をおとどけする次第です。

発掘に当り、湊県考古学会長にいろいろ御厄介になったことを付記して御礼申し上げます。

昭和55年3月

水見市教育長 斎藤道保



1図 遺跡付近図(50,000分の1)

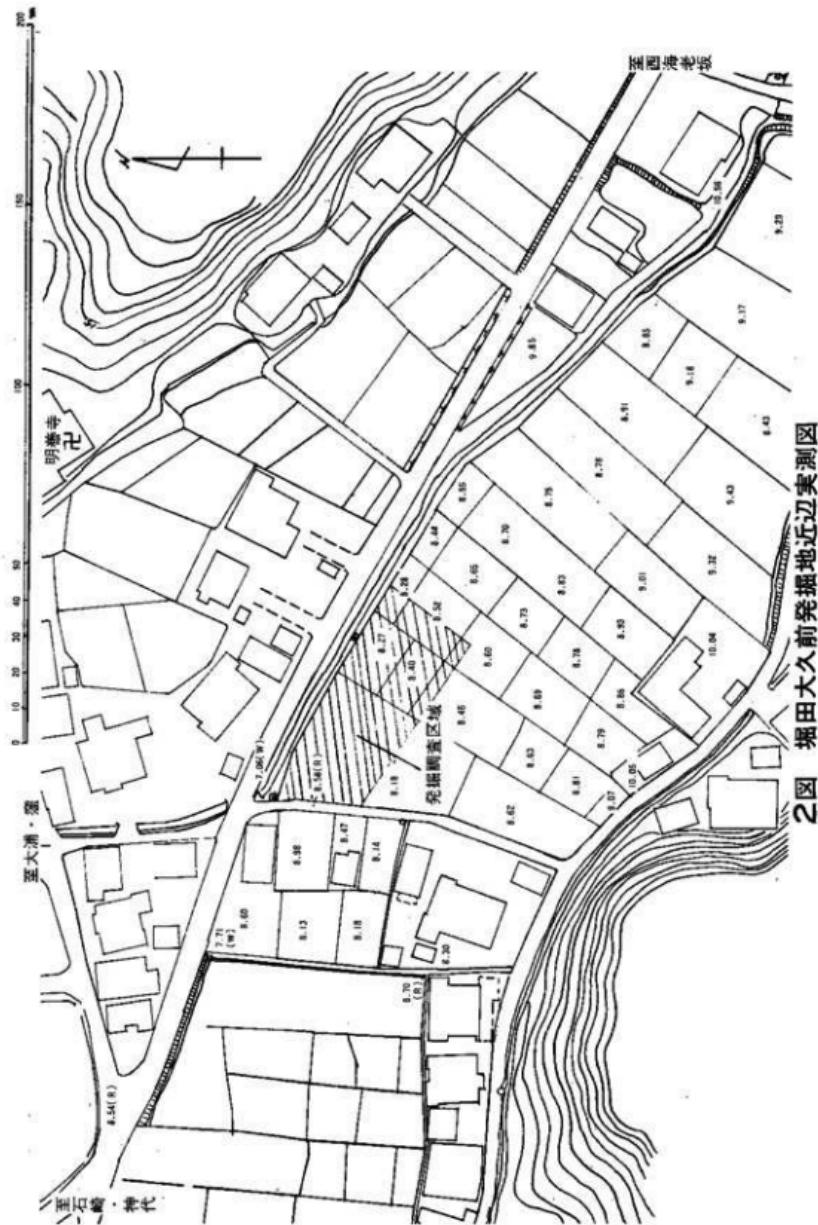
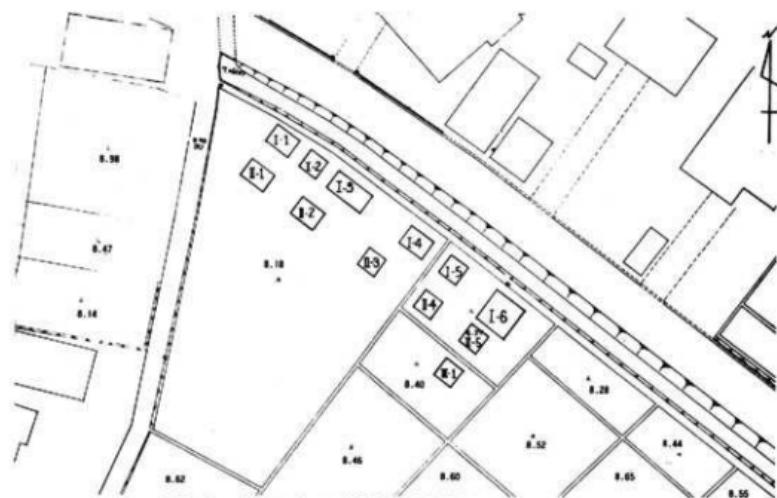
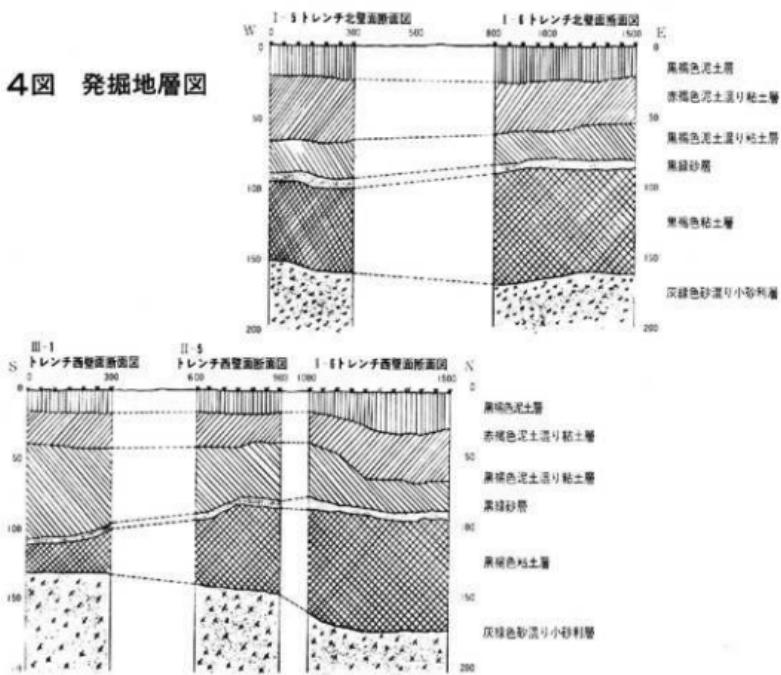


図2 堀田大久前堀地近辺実測図



3図 堀田大久前遺跡発掘トレンチ図

4図 発掘地層図



1. 遺跡の所在地

遺跡は、農免道路仏生寺太田線と一般地方道五十里水見線との交差点南側で、堀田部落のほぼ南端に存在する。この農免道路沿いに川幅1.5m、水深0.5mの堀田川が流れて居り、(この川は、仏生寺川の一支流である)遺跡のある所は標高8mほどの水田の一部である。

(1図・遺跡付近図、2図・堀田大久前発掘地近辺実測図参照)

また、近辺の遺跡として、堀田部落から飯久保部落への一般地方道仏生寺太田線を、神代温泉方面に南に折れた小川に添って、矢の方一丁目遺跡と、堀田大久前遺跡から西北500m地点に位置する。神代羽連遺跡がある。

2. 調査の目的

今回の発掘調査区域を含めて、氷見市土地改良区によって、昭和55年6月中旬から翌56年3月20日までの工期で、同地区に道路の新設と旧米の道路の幅員拡張工事を含んだ圃場整備事業が計画されていたために、この事業に先立って事前調査を行うことにした。

なお、昭和41年11月、同地区的堀田川右岸を走る農免道路を拡張するため、同川を改修した際に、当時の川底(現在の農免道路下部分)から、土師器の鉢(8図・出土遺物E、9図・出土土器実測図E)、須恵器の杯(8図・出土遺物F、9図・出土土器実測図F)、杯蓋(杯蓋碗を含む)、大型の盤、灰胎のある杯などが発見されている。

今回の調査区域も、当時の出土状況に詳しい氷見市文化財審議委員、児島清文氏の話を参考にしては、前回の出土地点隣接地を選んだ。また、堀田川堤防の維持管理上の制約のため、調査地区は堤防から1mほど離して設定せざるを得なかった。

さらに、前回の出土遺物が、当時の川底付近の相当深い地点(地表下1.5m以下)から出土しているため、川からの出水を懸念して、動力排水ポンプで排水を行なながら発掘にあたることにした。(5図・発掘地全景と発掘風景参照)

3. 調査の経過

(1) 調査団の編成

今回の発掘調査は、主に氷見市教育委員会がこれにあたり、次のような調査団が編成された。

調査団長 齋藤道保(氷見市教育委員会教育長、日本考古学协会会员)

調査指導員 細川真樹(高岡第一高等学校教諭)

調査担当者 小境卓治(氷見市教育委員会社会教育課主事、学芸員)

調査協力者 坂田美芳(氷見市教育委員会 社会教育課長)

東海正幸(同 社会教育係長)

西江義成(同 社会体育係長)

松本正彦(同 派遣主任社会教育主事)

池田晃(同 社会教育主事)

東海慎一(同 社会教育主事)

役割分担では、調査団長齊藤道保は、団の掌握と指揮全般、指導員細川真樹は現地での指導助言、小境卓治は事務全般と記録を受持ち、主に市教委社会教育課員らが発掘にあたった。

(2) 調査期日

昭和54年10月9日(火)から昭和54年10月14日(日)に至る6日間。

(3) 調査概要 (3図・堀田大久前発掘トレンチ図・参照)

10月9日(火)

齊藤道保団長、細川真樹、小境卓治を始め市教委社会教育課員による現地打合せを行い、あわせて発掘器材の運搬と発掘地区的設定を行った。調査対象面積は、東西50m×南北30m、面積約1,500m²とし、同地区に15m×3mのトレンチ12箇所を設定し、縦張り作業を行った。

10月10日(水)

バックホウにより表土層を0.8m~1.0mの厚さで除去し、その後、人夫による手掘調査を行なった。1列目、I-1、I-2、I-3、I-4、I-5の五つのグリッドには、遺物の出土はなかった。I-6グリッドの地表下1.6m~1.7m地点付近から、土師器片、須恵器片を中心に、やや集中的に遺物が出土したが、比較的散布の密度は薄かった。

10月11日(木)

遺物の包含状況を確認するために、前日比較的にまとまって遺物の出土をみた1列目I-6グリッド(3m×3m)を東方向に2m、南方向に2m拡張して調査したが、東方向への散布は次第に薄くなり、東壁付近では遺物は皆無であった。また、南方向も次第に遺物の散布は薄くなつたが、2m間隔を置いて、II-5グリッド(3m×3m)、更に2m置いてIII-1グリッドを設け調査した。その結果、II-5グリッドからは自然釉のかかった須恵器片と、自然遺物(木の種子)各一点が出土したが、III-1グリッドからは遺物の出土はなかった。

あわせて、I-5、I-6、II-5、III-1各グリッドの地層調査を行った。

10月12日(金)

2列目、II-1、II-2、II-3、II-4各グリッドを詳しく調べたが、遺構、および遺物の出土は見られなかった。

10月13日(土)

前々日調査したII-5グリッドを再調査したが、地表下1.2m~1.3mの黒褐色粘土層から土器細片を数点採集した。I-6、およびII-5グリッドを通じ遺物は灰緑色砂混り小砂利層の上にのるように、その上の黒褐色粘土層下部から出土していた。これ以上の調査で、遺構の発見及び遺物出土の可能性が少ないと判断で、同日夕方、現地での発掘調査を打ち切ることにした。

10月14日(日)

排水ポンプによるポンプアップの後、現状復原を図り、各グリッドの埋戻し作業にあたった。午後、現地での作業を終了し、撤収作業を行った。

4. 地層

出土遺物は、主に I - 6 グリッドを中心に、地表下1.6m~1.7mの黒褐色粘土層の下部付近から、その下層の灰緑色砂混り小砂利層の上に乗る形で出土している。

このI - 6 グリッドの地層断面は、計6層に識別できる。第1層耕作土（黒褐色泥土層、厚さ約20cm~25cm）、第2層赤褐色を帯びた泥土混り粘土層（厚さ約20cm~30cm）、第3層は第2層とやや判別しにくいか、黒味を帯びた褐色泥土混り粘土層（厚さ約20cm~30cm）、第4層は厚さ10cm程度の黒っぽい緑色がかった砂層、第5層黒褐色の粘土層（厚さ約50cm~60cm）、最下層第6層には、灰緑色を呈した砂混り小砂利層が見られ、遺物の大部分はこの砂混り小砂利層の上に乗る形で出土している。（4図・発掘地層図、6図・地層と土器の出土参照）

5. 出土遺物

ほとんどの出土遺物は、破片のみで完形品は皆無であった。須恵器片約90点、土師器片約70点、人為的に加工された木片数点等の人工遺物の他、しじみ貝、桃の種子、胡桃の種子、玉虫の羽根などの自然遺物20点余が出土した。

また、遺物の散布状況はバラバラで、不規則だった。その他の出土物としては、木炭、のろかす等が見られた。（6図・地層と土器の出土、7・8図・出土遺物、9図・出土土器実測図参照）

(1) 須恵器

○环

坏は、多くが有蓋坏と思われる。ろくろを用いた整形は良く整っている。

(1)及び(2)は平底で、口縁部は外側に向って斜に立上っている。（(1)口径13cm、高さ3cm、(2)口径12.5cm、高さ3cm）

(3)も同様だが、やや焼成が悪い（口径11.5cm、高さ3cm）。ほかに、坏の口縁片と考えられるものが數片ある。

(4)及び(5)は、底部に高台のついた坏で、(4)は平底に低い台をつけ、口縁は直に立上って僅かにふくらみをもっている。（口径11.5cm、高さ5cm）(5)は底部のみの破片で、台の径が9cmある。

(6)も高台を持つ坏で、口縁部がやや外側に開きかけんであり、底部に漆と思われるものが付着している。

○环蓋

坏蓋(7)は、蓋上面中央を観前で平らにし、扁平な宝珠鉢をつけたものであり、(8)及び(9)は、この鉢が凹んだ上部をもつ突起となっている。

(8)は、蓋の径15cm、高さ2.7cm、(9)は蓋の径16.5cm、高さ2.7cmである。

蓋裏端内側は、身うけのつくりがある。単に末端を折曲げた形のもの(10)、(11)、さらに内側に隆起をもうけてあるもの(12)などがある。

この中で、(7)及び(11)は坏蓋鏡として用いたものようで、墨が付着している。

○甕

甕には、大形の甕の破片が出土している。(13)は、厚手のもので、内外壁面には整形のための

板面によると思われる細い「かき目」を残し、口縁近く一条の稜線があり、その下に連続櫛目文が二段にわたってつけられている。

なお、自然釉のあるもの（7図・A、B）も二点ある。

○鉢

⑩は、壺もしくは鉢の底部と思われる破片で、底部につけられた高台が、ろくろをつかって整形する際に、窓で斜に削りとられている。

(2) 土師器

出土したものには、裏形のもの、鉢形のもの、杯、椀形のものが主だった。また、壺の内部を黒く塗った黒色土器片と、一点だが、壺の脚部かと想像されるようなものがあった。

○壺

例は、胴部をやや長めに、まるみをもたせて腰らました形と考えられるものが多い。口縁部は外反しており、口縁は器を平面上に伏せて整形したのであろう上下の歪はない。器内は、概して薄い。器内外面に整形の際、板などでこすった細いなあとがある。このこすり跡は器の上部では、口縁に平行してつけられ、下部では斜交するものもある。

⑪は、口径20.7cm、器表面は黒くすりけている。

⑫、⑬も、器形としてはほぼ同一と考えられ、胴部は脇みをもち、かつ比較的細長いものだろうと推定している。

○鉢

例は、鉢形と考えられるもので、口径32cm、赤褐色の土器で、口縁はわずかに外反し、胴部はまるく脇みをもった浅鉢型のものと考えられる。器内はわりと厚く、器内外に板片等によるなで跡が口縁に平行して残っており、腹部から下は、このなで跡を斜にもついている。また、器表面に油煙と思われるものが付着している。⑭、⑮も鉢の一部と考えられる。

○环

内面を窓でよく磨き、煤の多量に出る燃料の上にかざして炭素を付着させ、黒色にした土器である⑯。この黒色土器は畿内では8C頃に出現していくといわれるが、中部山岳、関東方面では、その出現はもう少し早いと考えられている。平底の壺である。

○壺？

壺の脚部かと思われるものの例は、末端で幅2cmもある割合粗製のもので、末端は平面をなしている。あまり大きくなない土器片なので、壺といえるか定かでない。

(3) その他の出土品

玉虫の羽根の一片が、美しい玉虫色に輝いて出土した。また、しじみ貝、桃や胡桃の種子のほか、木炭片とのろかすが一点出土した。

木片には一部を削ったり、切りこんだりしたような痕跡をもつものが、土器片の出土地点よりやや東方、つまり土器片の出土がなくなっている、砂礫層がやや高まってゆく際から出土した。

丁度、土器片が湖底に散在していると考えると、やや高い波打際から木片が出土した感じであった。これより東へ高まってゆく砂礫層からは、遺物の出土がなくなっていた。

5. 結　び

今回の調査では、遺構と考えられるものの発見はできず、人工遺物と自然遺物のみが出土した。出土した遺物や出土状況から、遺跡の意義がいろいろ考えられるが、この報告では、発掘の状況を概報するに止めた。

遺物の属する年代は、須恵器、土師器の様式から考えて、7C末から9Cに及ぶものと考える。

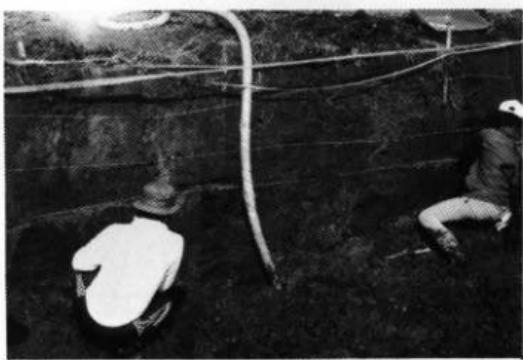
発掘地全景
(東方向を望む)



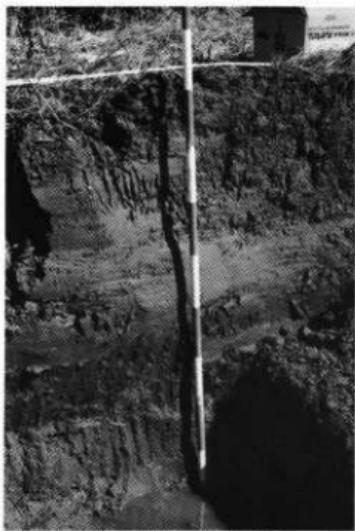
発掘地全景
(南東方向を望む)



I-6 グリッドの発掘



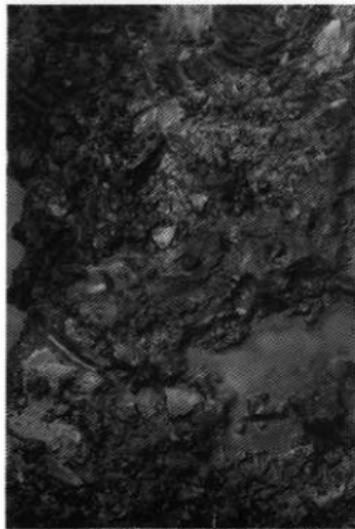
5図 発掘地全景と発掘風景



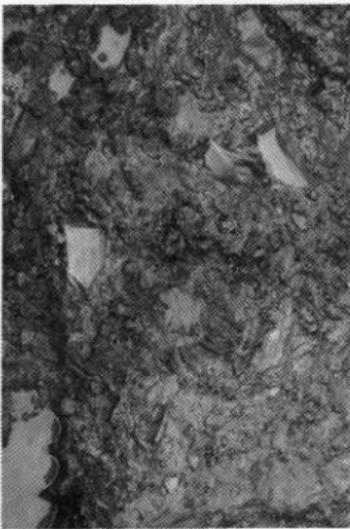
I-3 グリッド北壁面



I-6 グリッド西壁面土層

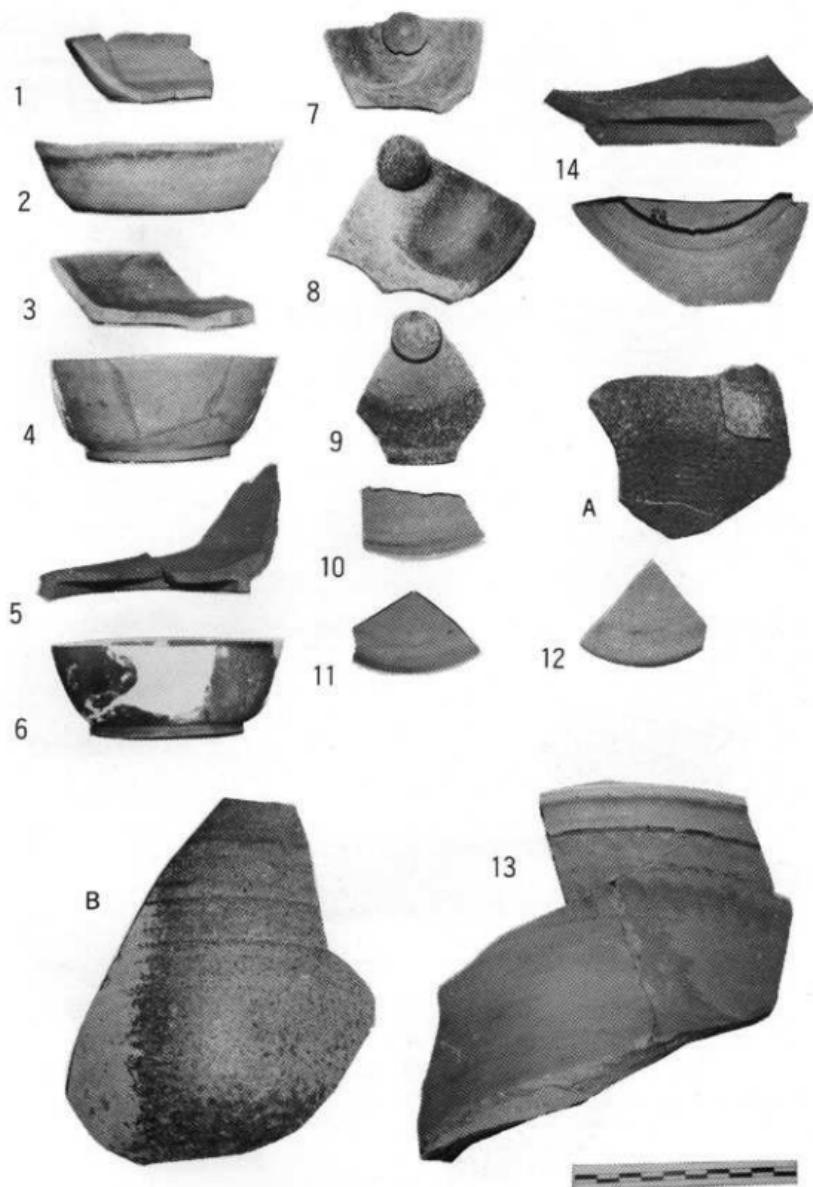


I-6 グリッド土器の出土状況



I-6 グリッド土器の出土状況

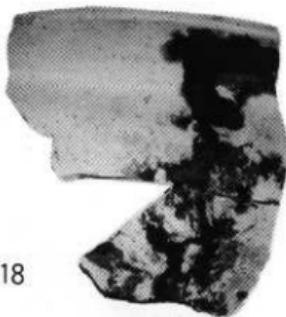
6図 地層と土器の出土



7図 出土遺物



15



18



16



17



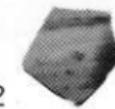
19



20



21



22



C

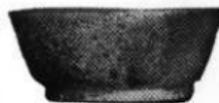


D

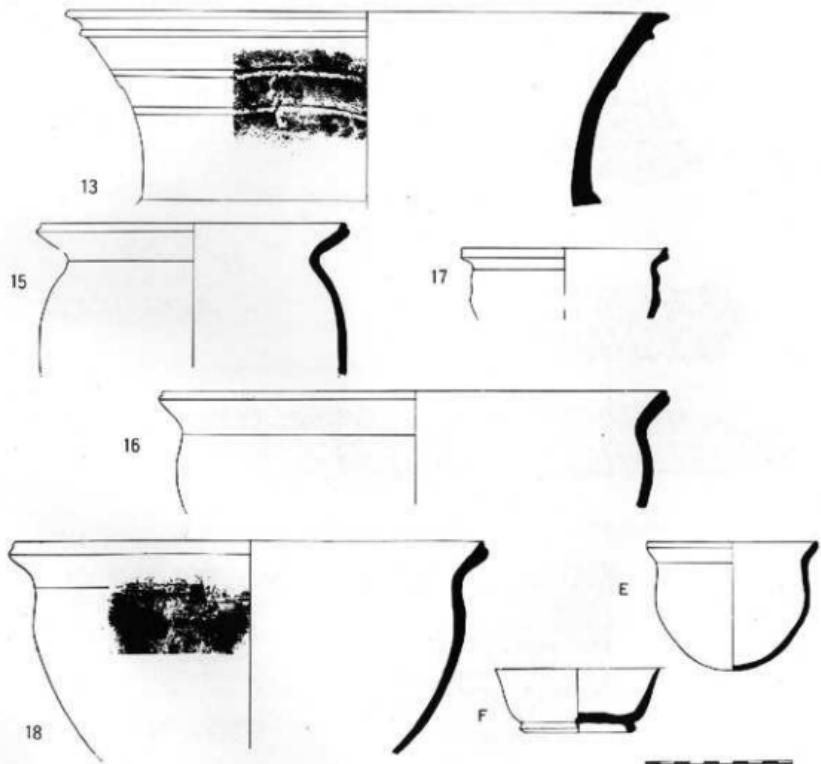
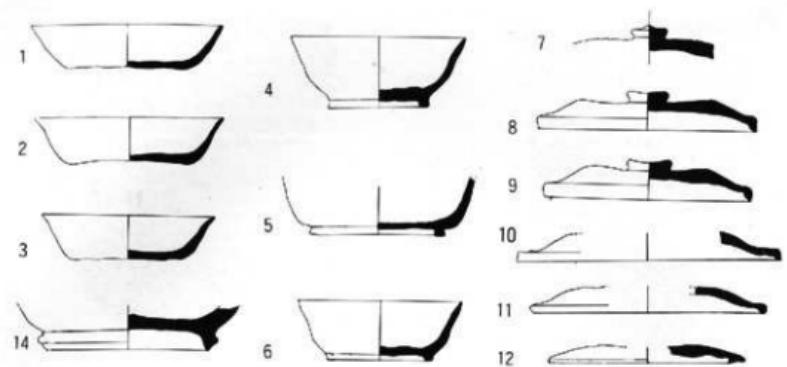
E



F



8図 出土遺物(E・Fは昭和41年出土)



9図 出土土器実測図(E・Fは昭和41年出土)

**富山県氷見市堀田大久前遺跡
発掘調査概報**

発行日 昭和 55 年 3 月 31 日

発行者 氷見市教育委員会
富山県氷見市丸の内 1-1

印刷者 アヤト印刷
富山県小矢部市八和町 4-32